

白氏文集 四十六 念金鑾子

加藤淳平

前月の詩より三年後、亡き娘が元の乳母と出逢ひたるにより、再び金鑾子を想ひ出して作れる詩。白樂天の金鑾子を失ひしは、樂天の駟出し官吏として京兆府、即ち長安の首都行政府勤務の頃なりしも、三年後は、同じ處にありしに非ず。漢土の官吏は、樂天の生きたる唐のみならず後代まで、儒教の原理に基づき、父母の世を去らば官務を離れ、喪に服するを義務とせり。此の詩を詠ひし時、樂天、母が喪に服し、母が生前の在所たる渭村にあり。そは長安西郊の農村なれば、詩人として實り多く、傑作を生みたる休閑期なりき。前月の詩の形式、嚴格なる「律詩」なれど、こは嚴格なる形式無く、語の選擇の、比較的 자유なる「古詩」なり。白樂天、形式嚴格なる詩に傑作多き唐詩の中、例外的に散文に近き平易なる詩を特徴とせる詩人なれば、「古詩」を得意とす。

念金鑾子

金鑾子を念ふ

衰病四十身

衰病 四十の身

嬌癡三歲女

嬌癡 三歳の女

非男猶勝無

男に非ざるも 猶無きに勝れり

慰情時一撫

情を慰めて 時に一たび撫づ

一朝捨我去

一朝 我を捨てて去れば

魂影處所無

魂影 處所無し

況念天化時

況んや 天化の時

嘔啞初學語

嘔啞初めて語を學ぶを念ふにおいてをや

始知骨肉愛

知るを始む 骨肉の愛

乃是憂悲聚

乃ち是 憂悲の聚まりなるを

唯思未有前

唯 未だ有らざりし前を思ひて

以理遺傷苦

理を以て 傷苦を遺れむとす

忘懷日已久

懷に忘るること 日に已に久しく

三度移寒暑

三度寒暑移れり

今日一傷心

今日 一たび傷心するは

因逢舊乳母

舊の乳母に 逢ひたるに因る

(大意) 病ひに衰えた四十の身の私に、可愛い盛りの三歳の女兒があつた。年頃になれば他家へ嫁いで行く娘であり、家を繼ぐ男の子ではないが、兒が無いよりはよい。情を通はして時々愛撫したりして居た。所がある日私を捨てて去って行き、跡を訪ねて行かうにも、魂も影もどこへ行ってしまったのか分らない。ましてこの兒の死んだとき、まだ言葉がよく話せず、ただどしい片言で話をしてゐたことを思ひ出すと、尙更胸が迫る。この兒を喪つて、肉親の愛とは、憂ひや悲しみの集積に外ならないことを知り始めた。ただ、この兒のまだ生まれなかつた前のことを想ひ出し、もともと居なかつた者ではないかとの理屈によつて、喪失の苦しみを忘れ去らうと努めて來た。どんな心の思ひも、一日が過ぎる

ごとに過去のものになって行き、いつの間にか三年の寒暑の季節がめぐった。今日またこの兒のことを思ひ出して心を痛めたのは、昔の乳母に逢ったからである。

(令和元年九月十八日受附)